

乱歩記念館構想は唐突に頓挫する

江戸川乱歩もお役人生活を送ったことがある。結婚の翌年、大正九年の二月から七月までというごく短い期間だったが、衆議院議員になっていた川崎克の斡旋で、数え年二十七歳の乱歩は東京市社会局に勤務した。『貼雑年譜』に記されたところを引用。

社会局ハ創設当時デ至極閑散デアツタカラ勤メハ此上
ナク楽デアツタガ、役場ノ吏員然トシタ人々ノ雰囲気
ガドウモ私ニハイヤデアツタ。何度トナク給仕ニオ茶
ヲ命ジテ、ナタ豆煙管デ煙草ヲフカシナガラ世間話ニ
一日ノ大部分ヲ過スヤウナ下級役人氣質ハ私ノ耐ヘ難
イモノデアツタ。

乱歩を辟易させた下級役人氣質は、現代にもなお生きつづけているのではないか。さすがにいまではそんな光景は見られないはずだが、僕と同世代で、高校を卒業してすぐ名張市役所に就職した連中などは、出勤すればまず、まさにお茶を飲み、煙草をふかしながら、職場に届いているすべての新聞をゆっくり回し読みするのを常としていた。

彼らはそんなふうにして、できるだけ働かないための具体策を仕込まれる。もうひとつの不文律、何も考えないという一条については、訓練はとくに必要とされない。素のままでもいい。Let it go というやつだ。地元の高校をおよそ優秀ではない成績で卒業し、お役所という名の無能と怠慢の楽園に職を求め、何も考えず、できるだけ働かず、責任

回避を第一義として職務にあたる。それがこいらあたり
の公務員と呼ばれる奇妙な種族だ。

前例の墨守ならお手のものだが、モデルもなければサンブルもなく、中央省庁からの指示もないとなれば、もう何もできない。ひとりよがりな思いつきにしがみつくことしかできない。名張市立図書館における乱歩関連資料の収集は、その端的な一例にほかならない。

だがそれにしても、と思う人があるかもしれない。開館当初は仕方がなかったとしても、乱歩がみずから作成した目録にもとづいて、いわば乱歩の自己収集を引き継いだ目録ができあがったのだから、それを増補するのは簡単なことではないか、と。

むろん、簡単なことだ。だが、できない。なぜできないのか、その理由はあとまわしにして、名張市役所のお役人が、つまりは名張市という自治体がいかに無能であるか、それを示す端的な例をもうひとつ記しておく。これはもともと、昨年発行の「伊賀百筆」第二十三号に寄せた漫才のテーマだったのだが、本誌一ページに記したとおり尻切れとんぼに終わってしまったため、それをフォローする意味でも簡単に報告しておきたい。

『子不語の夢 江戸川乱歩小酒井不木往復書簡集』の刊行を翌月に控えた平成十六年九月、乱歩生誕地碑が建っている土地をめぐって動きがあった、といったあたりのことは本誌一一ページから一三ページに記したところをお読みい